

金港堂・商務印書館・繡像小説

樽 本 照 雄

はじめに

上海商務印書館と東京金港堂が、約10年間合弁会社となっていたことは、長沢規矩也氏や実藤恵秀氏らによってはやくから指摘されている。たとえば、長沢規矩也氏は、「……光緒二十三年に印刷業を目的として創立せられ、数年ならずして我が金港堂の資本を入れ、出版界印刷界に大発展した商務印書館が出版の旁、印刷を発展せしめた」¹⁾と述べ、実藤恵秀氏はより詳しく、「この頃、商務印書館は日本の金港堂と正式に合作し、十萬円づつの資本を出し合つて事業を拡張し、印刷の外に出版をもすることになり、明治三十五年、長尾雨山^{マツ}を迎へて編輯長として盛に新規軸を出し、終に支那出版界の王座を占むるに至るのである」²⁾と記している。しかし、「正式に合作し」とあるにもかかわらず、合作の経緯、その解消の理由等、中国側の資料からも、日本側の資料からも、その詳細は必ずしも明らかにされてはいない。

金港堂は明治期、各種教科用図書を大量に発行し、文学社、普及舎、集英堂とともに明治の四大教科書出版社とよばれ、文学雑誌『都の花』、『文芸界』等の刊行で有名な古い出版社であることは、出版史、事典などには普通に見られ

- 1) 長沢規矩也「近代支那の図書及図書館」『アジア問題講座』第10巻創元社 1929. 10. 22 421頁。
- 2) 実藤恵秀「支那新書店盛衰記」『図書館雑誌』第34年第12号（第253号）日本図書館協会 1940. 12 542頁。後に『近代日支文化論』大東出版社 1941. 10. 15 に収録。107～108頁。

る。しかし、現在はすでに存在せず、³⁾ 博文館、春陽堂、新潮社のような社史をもたないため、商務印書館との関係がどのようなものであったのかわからないばかりか、金港堂について書かれた文章にも商務印書館という名前すら出てこない場合が多い。

京都に永沢金港堂というものがある。創業者永沢信之助は金港堂編集部で10年勤務し、1914年(大正3)独立開業したといい、⁴⁾ 名称の通り東京の金港堂と関係がある。永沢信之助の御子息信義氏が京都にお住まいで、直接の関係者ではないにしても、父君より当時の状況をお聞きで、何かご存知ではないかと考えおたずねしたところ、金港堂と商務印書館が合弁会社になっていた事など父から聞いたことはないし、初耳である、という不思議なご返事であった。

日本と中国の合弁会社であるからには、その公文書が外務省に保存してあるのではないかと私は予想をたてた。東京麻布にある外務省外交史料館で調査したが、新聞操縦のため、あの『国聞報』を外務省が買収した件とか、釜山関係、紡織関係の日中合弁会社についての記録は残っているのに、どういうわけか金港堂と商務印書館の合弁の史料は見当たらない。

1971年、香港より包天笑著『釧影楼回憶録』が出版され、驚くべき記憶力のよさを感嘆した紹介記事が新聞に載ったこともある。1年足らずではあったらしいが(1912年)、包天笑は商務印書館編訳所に勤めていたから、私は期待して該書の「在商務印書館」の章⁵⁾を読んだが、残念ながら、金港堂のことについては何も触れてはいなかった。

ところが、包天笑に後れること4年、1916年商務印書館編訳所に入った茅盾の最近の文章に、日本との合作について少し言及した箇所がある。「辛亥革命

3) 藤井誠治郎『回顧五十年』(藤井誠治郎遺稿回顧五十年刊行会1962.1.11)に「金港堂の創業は明治八年で教科書出版に隆盛を極めていたが、三十八年の教科書事件で蹉跌しその後は消極的となり、神田で出版を継続したが、更に麴町内幸町に転じ現在は無くなった」(93頁)とある。金港堂出身者が全国各地で書店を創業した場合、金港堂にちなんで上下2字をもらい「金〇堂」(たとえば金栄堂、金正堂、金星堂など。ただし、現存するこれらの書店が金港堂と関係があるかどうかは未調査)と名のつたという記事を読んだことがあるが、今、それを捜し出すことができない。

4) 前出藤井誠治郎『回顧五十年』94頁。

5) 包天笑『釧影楼回憶録』香港大華出版社 1971.6 385~393頁。

前、商務には日本人が投資しており、全資本金の半分を占めていた。印刷、編訳のふたつとも日本人が参加しており、当時日本がすでに掌握していた先進の印刷技術および日本の当時の小学、中学教科書を編集する経験を導入した。辛亥革命の時、中華書局が立ち、完全中国資本で出版事業を自ら行なうことをスローガンにし、商務の中日合資の事実を暴露した。そこで夏粹方、張菊生は日本人の占有する資本金を回収することを決定し、日本の経営者側に資本撤退の交渉を行ない、曲折を経てやっと成功、印刷、編訳の両方面の日本技師と顧問もすべて辞職した。⁶⁾

矛盾のこの記述は、商務印書館にふれた記事を見ること少ない最近においてはめずらしい部類に属するといえるだろう。日中交流が喧伝される現在だからこそ、商務印書館に日本資本が入っていたことをことさら活字にしたのではないかと考える人がいるかも知れないが、中国側の基本資料には、数は少ないがちゃんとその記録はあることはある。たとえば、「商務印書館大事紀要」⁷⁾の1914年(民国3)の項に次のように記されている。「日本資本を回収する(1903年日本の金港堂、上海に來り印書公司の開設を計画していた。本館はしばらく日商の資本と技術を利用したが、本年に至りすべての日本資本を回収した)。……」

また、陸費達によると、「文明(文明書局のこと——樽本注)が創業の後、商務ははじめて教科書を編印したが、張元濟、高鳳謙を中心に、日本人長尾慎太郎、加藤駒二等を顧問に任じた」⁸⁾とあるし、「教科書之發行概況」⁹⁾の1902年(光緒28)の項には、「商務印書館は高鳳謙を招聘し編輯所長と為し、蔣維喬の計画により日本人長尾、小谷、加藤の三名に協力を請い、劉崇傑が翻訳担当、高鳳謙、張元濟、蔣維喬、莊俞が編輯を担当し、半年を経て『最新初小国文教科

6) 矛盾「商務印書館編訳所生活之一」回憶録〔一〕『新華月報』(文摘版)1979.1 142頁。『新文学史料』1978年第1輯 人民文学出版社、三聯書店香港分店重印1979.5にもおさめる。

7) 張静廬輯註『中国出版史料補編』中華書局1957.5 557～565頁。

8) 陸費達「六十年来中国之出版業与印刷業」『申報月刊』創刊号 1932.7.15 15頁。張静廬輯註『中国出版史料補編』にも収録する。

9) 国民政府教育部編『教育年鑑』戊編第三。開明版1934年。未見。今、張静廬輯註『中国近代出版史料初編』(上海群聯出版社 1953.10。1954.5再版)による。

書』一冊が成った』¹⁰⁾と書かれている。文中の長尾は長尾楨太郎、小谷は小谷重、加藤は加藤駒二のことである。

以上わずかな記述ではあるが、商務印書館と金港堂の合作に日本人長尾楨太郎、小谷重、加藤駒二が関係していたことがわかる。

この三人の日本人のうち長尾楨太郎は、その号雨山の方でよく知られている。夏目漱石が第五高等学校時代、漢詩を添削してもらった同僚で、荒正人『漱石研究年表』の明治30年(1897)12月に、「★前年からよく漢詩を作り、同僚の漢文教授長尾楨太郎(雨山)に添削を求める(三十二年四月頃まで)」¹¹⁾とある人物である。荒正人は長尾楨太郎について注し、「元治一年(一八六四)一昭和十七年(一九四二)。香川県高松生れ。帝国大学文科大学古典科第一回卒業生。明治三十年九月九日第五高等学校漢文科主任に任ぜられ、明治三十二年十月三十一日高等師範学校に転じる」¹²⁾と記しているが、さて、帝国大学を卒業し、第五高等学校、高等師範学校の教授となった人物が、どういう経緯で上海に渡り商務印書館の顧問となったのか、金港堂との関係はいったい何だったのであろうか。

本稿は、金港堂と商務印書館の合弁およびそれにかかわった日本人について、不十分ながら調査してわかったいくつかを報告するものである。

金港堂の創設者原亮三郎

金港堂は、原亮三郎によって創立された。(以下「原亮三郎君伝」¹³⁾および「原亮三郎(教科書販売の成功者)」¹⁴⁾による)

原亮三郎は1848年(嘉永元)十月、美濃国(岐阜県)羽栗郡平方村に生まれ

10) 同上、228頁。

11) 荒正人『漱石研究年表』集英社『漱石文学全集』別巻1974.10.20 初版1976.8.20 初版4刷 125頁。

12) 同上。

13) 瀬川光行編『商海英傑伝』大倉書店・富山房書店1893.4 ダイヤモンド社・雄松堂書店復刻出版1978.1.20 9/51~61。

14) 実業之世界社編輯局編『財界物故傑物伝』(下)実業之世界社1936.6.5 251~255頁。

た。父は忠右衛門（一説に忠左衛門）、代々農を業とし、大庄屋を勤め、苗字帯刀を許されていた土地の名家であり豪族でもあった。本姓は伊藤、幼名を寿三郎、後、原亮三郎と改める。16歳にして父の職を襲い大庄屋となる。

後、名占屋に出て、当時洋学塾を開いていた林欽次（一説に鉄次）の門に入り仏語学を研究し、1872年（明治5）心に感ずる所あり、志を決し郷閩を辞して上京し、当時の碩儒藤川三溪（1818～1891）の塾に入り専ら漢籍を修める。家郷を出るにあたり、将来いかなる難苦に会おうとも学資を家にあおがずと心に誓ったばかりでなく、其妻子を父母に托していたから学資の請求をするわけにもいかず、上京後5、6カ月にして学資は欠乏した。藤川の塾をやめ、なす事もなく空しく歳月を送ったため其後再び大いに窮困し、やむを得ず仕官の途を求めようと郷里での知人駒通寮出在上田主計を訪問、同氏の紹介で当時駒通頭であった前島密にたのみ駒通寮の日給雇となった。

1873年（明治6）6月、前島の紹介で神奈川県の史生（下級書記官）に任ぜられ、1874年（明治7）1月、権少禄に進み、同年6月、横浜四小区戸長に栄転し、一等学区取締を兼任した。当時、同県下において小学校教科書を出版販売することの有利なことを説く人があり（一説に、神奈川県知事中島信行であるという）、1875年（明治8）、原亮三郎は官を辞し、横浜弁天町に小書肆金港堂を開き、もっぱら文部省編纂の小学教科書を翻刻発売した。

神奈川県のみならず、群馬、茨城、栃木、福島の諸県へも発展する便宜を考え、1876年（明治9）8月、店舗を東京日本橋3丁目に移し、教科書用参考図書、その他の各種書籍を出版発売し、国内各地に代理店を設け、明治16、7年にいたり府下有数の書籍商となり、教科書書肆としては筆頭にあげられるようになった。

「明治十七年故森有礼氏文部大臣たり一日君に謂て曰く我国の書肆は始んと書肆の本務を知らざる者なり何となれば則ち内職を主として人の出版したる書籍を委託販売するに過ぎず自ら書を著はし又人の著書を鑑定するの明なければなり斯の如きの有様にて到底善良なる書籍は得ること能はざるへし吾子若し将来盛に教科書を売らんと欲せば宜しく西洋書肆の法を取り自ら編輯の任に当りて以て此欠点を補ふへしと君則ち其言に従ひ竟に金港堂編輯所を設立し当時高

等師範学校教授たりし三宅米吉氏を聘して欧米に派遣し之か制度を調査せしめ其帰るを俟て泰西の大書肆に倣ひ編輯所と書籍販売店とを対立せしめ三宅氏を編輯所長として費用を惜まず教育社会に著名なる人々を聘して編輯所員となし専ら善良なる書籍を編成せしむるに勉めたり」¹⁵⁾

上記の引用文中、重要なことが2点ある。その1は、編輯所を設立したことであり、この経験が後年商務印書館が編訳所を設立することに影響を与えたのではないかとひそかに考えている。

もうひとつは、三宅米吉を中心とした高等師範学校との人的つながりである。国立学校の教員が、一私企業それも関連の深い教科書出版社によって海外に派遣されるとは尋常ではない。見方をかえれば、教科書出版会社が教育界の総本山ともいふべき高等師範学校とのつながりを求めたのは、当然といえるかも知れない。

1872年(明治5)、小学校の教育法を研究し、ならびにその教員を養成すべき機関として師範学校は設立された。1873年(明治6)8月、東京師範学校と改称。1875年(明治8)8月、中学教員を養成するための中学師範学科を設置。1886年(明治19)4月、高等師範学校と改称し、中等学校の教員のみを養成する機関となり、創立時より行なっていた小学教員の養成をやめる。1902年(明治35)3月、東京高等師範学校と改称してのち、東京文理科大学(1929)、東京教育大学(1949)と変遷してゆく。

創立40年を記念して、三宅米吉を主任として編纂された『東京高等師範学校沿革略志』¹⁶⁾には、校長嘉納治五郎の次のような序が付されている。

序

今回本校創立四十年記念式を挙ぐるに当り本校発達の歴史を尋ね兼ねて本邦普通教育の淵源する所を明らかにせんがため教授文学博士三宅米吉を主任とし教諭兼教授大橋銅造を補助とし以て一書を編成せしめ名けて東京高等師範学校沿革略志といふ唯紙面限あり詳細を悉すを得ず且事勿卒に出で十分精査する時日を有せざるが故に些細の点に於ては或は誤謬なきを保し難し然れども其材料は主として文部省並に本

15) 前出「原亮三郎君伝」『南海英傑伝』9ノ55。引用にあたって語句を一部改め、当用漢字を使用した。

16) 『東京高等師範学校沿革略志』東京高等師範学校 1911(明治44)10.30 国会図書館蔵。本書の閲覧については大阪経済大学図書館にお世話になった。

校の記録文書に拠り傍ら実歴せる人の記憶を参考したるものなれば其の大体に於ては正確なるを失はざることを信ずるなり（傍点樽本）

明治四十四年十月

東京高等師範学校長 嘉納治五郎

傍点を付したように、「其の大体に於ては正確なるを失はざることを信ずるなり」といい、また三宅米吉自身の編集になるものであるから、特に三宅については信頼できよう。該書の彼に関する記述を抜粋していくと下のようになる。

明治14.5年 教員となれり（31頁）

明治19年 此の頃教官中には国府新作、福富孝季、三宅米吉等の如き、私費を以て海外に遊学するもの亦少からざりき（40頁）

明治19年 三宅米吉職を辞し（44頁）

明治23年 三宅米吉も亦先に海外より帰りしが、是に至り再び嘱託講師となりしなり（44頁）

明治35年 文学博士三宅米吉（70頁）

三宅米吉は明治14年本校教員となり、19年辞職し、23年再び講師となり、28年以来教授の職に在り。前後凡そ27年なり（72頁）

「私費を以て海外に遊学するもの」のうちに三宅を入れ、さすがに金港堂の名は見えない。その間の事情を鈴木博雄『東京教育大学百年史』¹⁷⁾ および『新撰大人名辞典』¹⁸⁾ 等によって補う。

三宅米吉は、1860年（万延元）和歌山藩士三宅栄充の長男に生まれた。1872年（明治5）上京して慶応義塾正則部に入学、しかし、塾則が変更になって正則部が廃止されることになり、尾崎行雄とともに退学する。大学にははいらず、父親の任地新潟に赴き、官立新潟英語学校の教員となる。その後、百工化学教場助手、新潟学校教員、千葉県師範学校教師を経て、1881年（明治14）東京師範学校の教員となったのは上記の通りである。ただし、附属小学校の教員であり、化学と習字を教えた。

1883年（明治16）「かなのくわい」常議員となり、雑誌『かなのまなび』を創刊、つづいて『かなのしるべ』（1884年 明治17）、『かなのぎつし』（1885年 明

17) 鈴木博雄『東京教育大学百年史』日本図書文化協会 1978.7.28.

18) 『新撰大人名辞典』第6巻平凡社 1938.10.31.

治18)を刊行、国字国語の改良に努めた。1886年(明治19)『日本史学提要』第1輯を普及舎より発行。当書について鈴木博雄は、「国史の先史部分を、考古学的方法を用いて科学的に捉えようとしたもので、当時の漢学流の歴史学や漸く台頭しかけた社会史、文明史、開化史などに多大の影響を与えた史学史上の名著である」¹⁹⁾という。同年「三宅米吉職を辞し」と沿革略志にあるのは、東京師範学校が高等師範学校に改革されたため自然廃官となったためである。そのため「中川謙二郎の紹介で、書肆金港堂に入り編輯所評議役並に取締役となる。その時示した三宅の『実業家としての見識才幹は実に非凡なもので当時の社長原亮三郎氏を敬服させた』(湯原元一)といわれている。この年、東京師範学校最初の留学生候補者になったが、卒業生ではないという理由で駄目になり、代わりに金港堂の後援で19年7月、欧米に留学」²⁰⁾した。

1888年(明治21)、帰国後、²¹⁾金港堂編輯所長として教科書の編集に新機軸を出し、自ら『文』を創刊²²⁾して当時の文化に貢献し、かたわら同書肆より『都の花』(1888年 明治21.10.21~1893年 明治26.6.18)を発行させ、大日本教育会評議員、東京人類学会幹事、金港堂副社長、帝国博物館学芸委員を歴任する。大日本教育会は、原亮三郎が1878年(明治11)頃西村貞等と計って教育の普及策を講じるために設立した東京教育会の後身であり、同会に原亮三郎は毎年相当額の寄附を行なっている。

1890年(明治23)、高等師範学校の歴史の講義を囑託されたのが、上記「是に至り再び囑託講師となりしなり」である。1895年(明治28)、高等師範学校教授となり、考古学会を創設主宰し、1899年(明治32)東京帝大文科大学講師、1901年(明治34)文学博士、1920年(大正9)嘉納治五郎の後を襲い高等師範学校

19) 前出鈴木博雄『東京教育大学百年史』161頁。

20) 前出鈴木博雄『東京教育大学百年史』162頁。

21) 『新聞集成明治編年史』第7巻15頁に次のような記事が収録されている。「三宅米吉婦朝す [一八、時事] 府下の教育書舗金港堂編輯所の用務を帯び、教育取調べとして欧米諸国を巡廻中なりし三宅米吉氏は、前項加藤済氏と帰途同行にて本日着京の筈なり。前日の紙上に、二月婦朝としたるは誤りなるよし」

22) 同上、109頁。『文』金港堂より発行 [七・一五、時事] 三宅米吉氏の主筆にて、日本橋区本町三丁目の金港堂より「文」と称する雑誌を発兌する由は既に紙上に記せしが、昨十四日を以て弥よ〜其第1号を発刊したり」

長となり、1922年（大正11）帝室博物館総長を兼任、宮中顧問官、帝国学士院会員、東京文理科大学長の顕職につき、さらに古社寺保存会委員、文政審議会委員、考古学会長を歴任、1929年（昭和4）11月11日、70歳で没す。

以上見てきたように、三宅米吉が欧米に留学した時の身分は、「原亮三郎君伝」中に言うような高等師範学校教授ではなく、金港堂の社員としてであるが、彼が高等師範学校に再び招かれてからも金港堂との関係は持続された。というのは、「当時全所（金港堂編輯所——樽本注）に在勤したる編輯員にして其後任官して今は要路に立てるもの数十人の多きに達し又現に今日其編輯所員たる者数十名にして三宅米吉、能勢栄、中根淑、庵地保、新保磐次、加藤駒二、渡辺政吉、堀均一氏等済々たる多士皆一堂の中に集まれり」²³⁾ という記述があるからである。その中の新保磐次も、三宅米吉と同じく高等師範学校の教官講師の職に就いたことがある（1886年 明治19）人物である。

原亮三郎は、編輯所に高等師範学校からの三宅米吉をすえ、小学および中学の各教科書より、法律、政治、経済、理化、哲学等の書籍を多数発行し、かつて文部省編輯局長であった伊沢修二をして、今、文部省の総力をあげても金港堂に及ばない、といわしめたという。²⁴⁾ また、1887年（明治20）に創立された東京書籍出版営業組合の頭取を、翌1888年（明治21）の2年間つとめた。

金港堂が二葉亭四迷の『浮雲』を出版（第1篇1887〈明治20〉6月、第2篇1888年〈明治21〉2月）したり、文学雑誌『都の花』を創刊するにあたり、山田美妙を硯友社から引き抜いたことは有名である。

「山田はこの年（1888年 明治21——樽本注）の秋頃、金港堂の中根香亭から、新しく大規模な文学雑誌を出したいから主筆として編輯を引き受けてほしい、と相談を持ちかけられてゐた。当時の最も有力な出版社である金港堂が新しく文学雑誌を出し、主筆として二十一歳の山田を迎へるといふのは破天荒なことであつた」²⁵⁾ 「この年の十月頃、尾崎紅葉と石橋思案とは、何とかして美妙を硯友社に引きとめようと考へた。石橋が美妙の家を訪ねたが、留守だといふこ

23) 前出『原亮三郎君伝』『商海英傑伝』9ノ55～9ノ56。

24) 同上、9ノ56。

25) 伊藤整『日本文壇史』2 講談社 1954. 3. 31 57頁。

とで逢へず、尾崎が手紙を出したが、それにも返事がなかつた。それは美妙の立場からすると口うるさい無名作家の集団から別れたといふ意味であつた。そして噂にのぼつてゐた金港堂の新雑誌『都の花』の創刊号はその十月の末に本屋の店頭に現はれた²⁶⁾ という伊藤整の文章を見るだけでも、当時の金港堂をめぐる状況がわかるのではないか。

1892年(明治25)、組織を改めて資本金50万円の株式組織とし、金港堂書籍株式会社となる。原亮三郎は同時に社長の座を辞し、長子亮一郎に譲つた。²⁷⁾ 1918年(大正7)12月8日、病を得て没する。享年72歳。

さて、金港堂と商務印書館の合併については、前出『財界物故傑物伝』の「原亮三郎」にわずか次のように記されているのみである。

なお、その後、三十六年には支那に渡り、上海に於て後年の大出版印刷会社たる商務印書館の設立に参加し、支那の出版界に一新面を開いた。²⁸⁾

また、『東京書籍商伝記集覧』の「金港堂書籍株式会社」に、

副業トシテハ清国ニ於ケル出版事業ニ著手シ、上海商務印書館ト合同経営シ、資本金一百万円ノ株式会社ヲ組織シ有限公司商務印書館ト改称ス。²⁹⁾

とあるだけで、長尾雨山、小谷重、加藤駒二らの名前すら見えず、もとより合併の詳細を知るべくもない。

初期の商務印書館

商務印書館、それも特に初期の商務印書館についての専論は、日本人のものとしては実藤恵秀氏の「初期の商務印書館」³⁰⁾ ぐらいしか私は知らない。氏の

26) 同上、61頁。

27) 『財界物故傑物伝』には、社長交替を1900年(明治33)とするが、『東京書籍商伝記集覧』の「同二十五年ニ至テ今ノ組織ニ改メ原亮一郎之ガ社長タリ」という記述と、『新撰大人名辞典』の原亮一郎の項に、「25年先代亮三郎の後を継ぎ、出版業金港堂の経営に當つてより斯界の雄として雷名を馳せた」とあるのによつた。

28) 前出「原亮三郎」『財界物故傑物伝』254頁。

29) 『東京書籍商伝記集覧』原書名『東京書籍商組合史及組合員概歴』1912.11.6。今、青裳堂書店の影印本(1978.4.30)による。182頁。

30) 実藤恵秀「初期の商務印書館」『日本文化の支那への影響』東京螢雪書院1940.7.5所収。241～248頁。

この文章は、主として『最近三十五年之中国教育』(1931年出版)という商務印書館創立35周年を記念して出版されたものに拠っているらしいが、私は本書を未見である。また、『四十年大事記』、『商務五十年』という本も商務印書館から出ているらしいが、いずれも未見というわけではなはだ心もとない。ただ、王雲五著『商務印書館与新教育年譜』(台湾商務印書館 1973. 3)という大冊に、比較的くわしく商務印書館の初期のことも記載されているので、以下の記述は主として同書により、その他出版史料等に散見する関係部分から補足することにする。

実藤氏の前出論文によると、創立から1931年までを4期に分けているという。

1. 創業時期 (1897年 光緒23 明治30—1902年 光緒28 明治35)
2. 中日合資時期 (1903年 光緒29 明治36—1913年 民国2 大正2)
3. 発展時期 (1914年 民国3 大正3—1925年 民国14 大正14)
4. 改革時期 (1926年 民国15 昭和元—1931年 民国20 昭和6)

商務印書館自身、「中日合資時期」というように合弁の事実を認めているのが興味深い。本稿で関係のあるのは、そのうちの創業時期と中日合資時期であるのはいうまでもない。

1897年(光緒23), 商務印書館は、その名の通り、「商務」(商業の事務)に関する「印書」(印刷)を行なう単なる印刷会社として設立された。

発起人は、夏瑞方³¹⁾、高鳳池、鮑咸亨(一説に感恩)、鮑武昌兄弟の4人であるが、この4人はともに教会の設けた上海美華書館の職員、工員であった。夏、高のふたりは事務、鮑兄弟は技術の方である。

当時上海では、英語を学ぶ者が多く、用いていた教科書は大多数がイギリス人がインドの学生用に編集した英語教科書であった。それを Indian Readers という。これには中国語の注釈がなく、読者、教師ともに不便を感じていたの

31) 茅盾は、夏瑞方について次のように書いている。「夏^フ粹方(瑞方)はもともと上海『字林西報』の植字職工長で、当時、英語を植字できる労働者はきわめて少なく、それゆえ賃金は高かった(商務の印刷所の英語植字工の賃金は中国語の約倍である)。資金がたまと自分で小印刷所をおこし、寧波の労働者10名たらずを採用し、商務印書館と名付けた。主要な業務は小口印刷品を引き受けることで、決して出版機構ではなかったが、すこぶる利益があがった。1900年前後、資本を拡充し英語教科書を翻刻した」前出「商務印書館編訳所生活之一」142頁。

に目をつけ、中国語の注釈をつけたなら教学に便利だし、営業にもよいだらうということで、謝洪寶という牧師に依頼し訳注を付し、『華英進階』と名付け、その第1冊を『華英初階』と称した。

市場をさぐるため、まず『華英初階』を2千冊印刷し、夏瑞方が各学校に売り込んだがわずか20日で売り切れてしまった。これに勢いを得て、発起人の4人がそれぞれ1千円を投資し、4千円の資本で上海江西路徳昌里に2階が3間、階下が3間の家をかり、印刷機を数台購入して印刷所を創設した。最初は夏瑞方と鮑兄弟との共同運営で、鮑兄弟は印刷を担当し、夏は自分のところで印刷した『華英初階』『華英進階』全集を販売に外回りをし、かたわら外部からの印刷を引き受けた。夏と鮑兄弟は独立して経営することとし、美華書館を辞め、営業が漸次発展するにおよび高鳳池もまた辞職して商務印書館の方に参加した。この英語教科書が大当たりをとった。英語読本に中国語の注釈をつけることが当時としては独創であり、英語教師と学生の歓迎を受け、販売数は非常に多くその利益は莫大なものであった。教科書の販売と同時に受注印刷の方も鮑兄弟の長年の技術と経験がものをいってよく発展した。そのため、創設後2年もたたないうちに印刷所が手狭になり、翌1898年(光緒24)、北京路順慶里に移転し(美華書館の西隣であるらしい)、³²⁾最初の借家の4倍の広さの12間の家を占め、印刷機もふやしほかに小規模な営業所を設けた。

1898年(光緒24)、光緒帝を擁した康有為、梁啓超らの改革グループ変法派は、人材養成のための学堂開設などを献策し、それらは次のような政令を発せさせることになった。

軍機大臣、総理各国事務王大臣をして京師大学堂創設の会議をなさしめ、各省に学堂設立の倡となす。

五月五日(旧暦) 八股取士の制を廃し、時務策論での試験に改める。(科挙制度の改良)

五月八日 軍機大臣、総理衙門、京師大学堂章程を奏す。

五月二十二日 各省州県の大小書院、一律に高等、中等および小学堂に改建するこ

32) 実藤恵秀「初期の商務印書館」によると、1898年(光緒24)の昌言報に載った商務印書館の広告に「仕商賜顧、請至北京路美華書館西首秋字第四十一号内面議…」とある。(傍点原文のまま)

と。

七月二十四日 医学堂の設立を命じ、京師大学堂の兼轄に帰す。

しかし、西太后は袁世凱と結んでクーデターを起し、変法派の政治は百日あまりでつぶれた（戊戌政変）が、新式学堂を興すことについては影響はなかった。というのは、1862年（同治元）、北京に同文館が設立されてより、新式学堂は各地にあいついで開かれ、その趨勢は十分に固まっていたからである。上海の広方言館（1863年 同治2）、福建の船政学堂（1867年 同治6）、上海の正蒙書院（1878年 光緒4）、天津の電報学堂（1879年 光緒5）、天津の水師学堂（1880年 光緒6）、上海の電報学堂（1882年 光緒8）、天津の武備学堂（1885年 光緒11）、広東の水陸師学堂（1887年 光緒13）、南京の水師学堂（1890年 光緒16）、武昌の自強学堂（1893年 光緒19）、天津の中西学堂（1895年 光緒21）、南京の陸軍学堂（1895年）等々、枚挙にいとまがない。

商務印書館が、新式学堂設立があいついだ時期を背景に出現したことは注目に値する。後に述べる商務印書館の教科書出版もこういった時代の流れを無視しては理解出来ないであろう。

1900年（光緒26）、商務印書館は、日本人が上海で経営していた修文印刷局（一説に印書局）を買収した。修文印刷局は中国ではじめて紙型を用いて活版印刷している。³³⁾

外来の印刷は日増しにふえたが、出版の方は英語読本1種類に限られていた。それというのも、編訳を主宰できるほどの人材がなかったからで、こまごました外来の原稿を受けるはめになったが、ほとんどが日本語からの翻訳でろくなものがなく、多くは直訳でいいまわしが硬い。印刷して発行しても多くは長つづきせず、初期の出版物で民国時期にまで流布した日本の訳本は、わずかに所謂日本法規大全³⁴⁾のみである。全80冊というから、これは当時最大規模の

33) 賀聖鼎「三十五年来中国之印刷術」『最近三十五年之中国教育』商務印書館 1931 初載。今、張静廬『中国近代出版史料初編』群聯出版社1953.10 265頁による。

34) 王雲五は「私も見たことがあるが、全百冊で木箱にはいついた」というが、『東方雑誌』第8巻第1号1911.2.25に掲載された「商務印書館出版図書総目録」の法律の部に「改訂日本法規大全 八十冊附解字1冊 連木箱或布套十函 連史紙二十五元有光紙十五元」とあり冊数が合わない。

出版物で少なからぬ資本を費やした。

そうして、これが商務印書館の経営にかげりを与えることになってしまった。創設後、利益が大きくあがった1, 2年から、一転して支出が日に日に巨大となり、その他の出版物も多く、資金繰りが困難となり外からの資金を導入することとした。外からの資金というのは、設立者4人以外からのものを募集することで、金港堂との合弁の下地がこの時出来たというべきであろう。

1901年（光緒27）、資金募集に応じたのが張菊生（元済1866～1959）である。

夏瑞方が印刷の外注を取りに当時の文化機関をかけずりまわっていた頃、南洋公学の漢文総教習張菊生と知り合いになった。

張菊生は浙江省海塩県の名門の出身で、若くして翰林院に入り、当時名声も高かった。康、梁の維新派ではなかったが、新学を常に提唱していた。戊戌新政が挫折し六君子が犠牲となり、康、梁は亡命したが、張菊生はもともと彼らとは無関係であるので無為のままにいたるところ、かえってとぼつちりをくい免職のうえ永久不登用の処分を受けてしまった。しかたなく原籍にもどる途中、上海に立ち寄りたまたま南洋公学に招かれ漢文総教習となった。南洋公学では西洋語総教習のアメリカ人と懇意になり、外国語の相互教授を行ない張は英語に通ずるようになる。夏瑞方は、南洋公学でよく印刷物の受注をしていたのでそれが機会となり面識を得ると、商務印書館への投資と編訳を主宰してくれるよう張菊生に相談をもちかけた。張菊生はついに南洋公学を辞職し、印錫璋とともに商務印書館の株主となり、商務印書館は改組して株式会社となった。資本金は増資して5万元である。

1902年（光緒28）六月一日、河南大学堂設立される。同年七月十二日、張百熙は学堂章程を上奏する。いわゆる欽定学堂章程である。それには、京師大学堂章程、大学堂考選入学章程、高等学堂章程、中学堂章程、小学堂章程、蒙学堂章程がのべられている。同年十一月、京師大学堂が開学し、仕学館生57名、師範館生79名を試験の上採用する。商務印書館は編訳所を増設し、中小学師範女子学校用の各種教科書を編訳し、並行して各種図書を刊行することとなる。

ここまでの前記4つの歴史区分のうちの創業時期である。この時期は、英語読本を出版していたとはいえ、実際は印刷業を主としていた印刷会社にすぎな

かったが、張菊生が加入し編訳所を新たに組織すると、政府の欽定学堂章程に呼応し率先して中小の教科書を出版するようになった。印刷業から出版業への一大転換である。その教科書出版の範は日本に求められた。

北福建路に印刷所と編訳所をたて、英租界棋盤街（一説に河南路）に発行所を設ける。商務印書館飛躍の態勢はととのった。同年の出版図書は15種、27冊であった。

さて、いよいよ金港堂との合弁である。合弁の年は1903年（光緒29 明治36）であるが、急に合弁が成立したわけではなく、その準備期間がそれ以前にあったはずだ。前出王雲五『商務印書館と新教育年譜』は合弁問題についてひとつも触れていないので、「三十五年来之商務印書館」の言及部分を、実藤恵秀氏の文章からそのまま孫引きする。

「壬寅癸卯（1902年光緒28—樽本注）の夏、始めて印刷所を北福建路に建て、編訳所を唐蒙街に設け、発行所を棋盤街に設け、規模粗ぼ貝り、已に中国書業の新紀元を開く。当時聞く日本金港堂あり、滬に印書館を設立せんと欲す、資本極めて雄厚なりと、本館、当時の中国印刷業頗る幼稚を形し、絶えて日人と對抗競争し難きに鑒み、祇だ暫時利用合作の一法あり、以て徐ろに自身の発展を謀らんとす、乃ち与に商定し、各資本十万元を出し、並に日本技師を聘請し、印務を襄助せしむ。惟だ所訂の条件は、並く事々平均に非ず、經理及び董事の如きは、全く華人に係る、祇だ一二の日人列席して旁聴するを得、日人を聘用するも隨時辞し退くる等是れなり。（中略）日本と一時権宜の計にして蓋し以て外人の學術を利用し印刷技芸を伝授せられ、一方更に外股を借りて以て、資本に充て独立經營の基礎と為す。嗣いで後印刷技術固より進歩多く、事業上亦た發展多し。其の時、風氣漸く開け、国人の股株を附する者、日に漸く増多す。民国元年に至り乃ち外股を收回せんことを議し、日本の股東（株主）と磋商し、時を経ること三載、會議すること数十次を経、始めて全数收回するを得、本館遂に純粹本国資本の機関となれり」³⁵⁾（傍点原文のまま）

これに続けて、実藤氏は、「右の一文は民族意識の高まつて来た民国二十年に書かれたものであるとはいへ、われわれから見ると長尾雨山の抹殺の如きは甚だ科学的でないと思ふ」と憤慨されている。その憤慨は正しい。上記引用部分のみでは、日本人の影をつとめて消そうという姿勢がうかがえるだけで、長尾らの編訳方面での協力がどの程度のものであったのか不明である。ところが、

35) 前出実藤恵秀「初期の商務印書館」247～248頁。

『東方雜誌』創刊号(1904年〈光緒30〉3.11)に掲載された教科書広告を見れば、当時は、かえって日本人の参画を強調している事実を見い出すことができる。

最新初等小学国文教科書出版

児童が入学するのは、漢として知識がないからである。しかるに、我が国の文字は大半が晦渋難解で、往々にして数年学んでも手紙一通書けず、帳簿ひとつ記せぬ者がある。教育の普及をはかろうとすれば国文に注意を払わないわけにはいかない。近年、広く学堂を設立し、いささか児童用読本を編するものがある。しかしながら、実用に供してすべて適合するというわけではない。あるものは程度が高すぎ、会得しがたく、あるものはわずかに字義をあげるのみで、一貫しているとはいえず、あるものは外面に西法を踏襲し、華文の性質にあわない。また、あるものは俗語を採用し、彼此の通用が不能である。教育の志ある者は、遺憾に思っていた。本館は特に専門家に請い、人念に編纂を行ない、あわせて日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君、高等師範学校教授長尾楨太郎君およびかつて中国学堂に従事したことの福建の高君鳳謙、浙江の張君元済を招聘し、詳細に校訂を加え一字もゆるがせにしていな。経営数カ月にしてはじめて数冊が成り、急需に応じるためまず第1冊を出版する。半寸大の活字を用い、附図は90余幅、印刷は鮮明である。教授法はしばらく遅れて続けて出版される。本書の詳細を知りたい者は、二月十三、十四、十五日の中外日報の広告を見られたい。小売りは各冊大洋一角五分、大口には割引く。

上海商務印書館謹啓

長尾兩山、小谷重がその肩書きとともに中国の書籍に紹介された最初の例であろう。

また、同じく『東方雜誌』第2年第3期(1905年〈光緒31〉4.29)の「最近理科教科書」の広告にも、「日本前高等師範学校教授新保磐次君」という名前が見られる。この新保磐次とは、高等師範学校に1年たらずに在職のうえ、金港堂編輯員となった人物であることはすでに触れた。

『最新初等小学国文教科書』は大いに売れ、続けて210冊が編成されたという。つづいて、杜亜泉等編『格致』3冊、徐雋編『算術』4冊、張元済等編『修身』10冊、杜亜泉・王兆毋編『筆算』6冊、杜綜大・杜秋孫編『珠算入門』2冊、編者名不明『地理』4冊の計6種が出た。最新高小教科書としては、張元済等編『国文』8冊、莊俞編『歴史』4冊、姚祖晋編『地理』4冊、謝洪資編『理科』4冊、張景良編『算術』3冊、黄啓明編『珠算』4冊、高鳳謙等編『修身』

4冊、このほか『農業』と『商業』各4冊の合計9種が出された。最新中学教科書として、黄英編『動物学』、アメリカ甘恵徳編『植物学』、杜亜泉編『鉱物学』、謝洪資編『物理学』『化学』『生理学』『代数学』（2冊）『平面幾何』『立体幾何』『三角』『用器透視画』『投影画』等各1冊、計11種が、そのほか徐永清編『鉛筆習画帖』各8冊、『英文初範』1冊、『万国輿図』1冊が出た。³⁶⁾書名だけを見ると日本の教科書と錯覚を起こすくらいだ。

1903年の出版新書は51種66冊で、前年の15種27冊と比較すればその躍進ぶりがうかがえよう。資本金も20万元に増資されており、1901年が5万元であるから何と4倍である。これも金港堂との合併を考えに入れなければ理解できない。

『東方雑誌』創刊号に掲載された広告をもとに、当時の商務印書館の出版目録が前出王雲五著『商務印書館与新教育年譜』にかかげられている。いちいち検討してゆく余裕はないが、そのほとんどが日本語からの翻訳あるいは日本語からの重訳である。

1903年（光緒29）には李伯元主編『繡像小説』を創刊し、³⁷⁾1904年（光緒30）には『東方雑誌』、1909年（宣統元）『教育雑誌』、1910年（宣統2）『小説月報』、1911年（宣統3）『少年雑誌』をそれぞれ刊行する。かたわら『説部叢書』『林訳小説』を発行している。阿英の『晚清戯曲小説日』の「小説日」部分をみると、1902年から1912年の10年間に出版された商務印書館の単行本（『繡像小説』『小説月報』等の掲載分は除く）は、翻訳185種、創作11種の計196種で、2位の小説林社の翻訳81種、創作17種計98種を大きく引きはなしている。³⁸⁾

また、商務印書館は一方で技術面での革新にも意を用い、1903年より1905年まで毎年のように日本人技術者を招いて最新技術を導入している。10年間という商務印書館の金港堂との合併時期は、後の商務印書館の発展のまさに根幹で

36) 「教科書之発刊概況」張静廬輯註『中国近代出版史料初編』所収 228～229頁。

37) 「商務印書館大事紀要」（『中国出版史料補編』所収）には不思議なことに『繡像小説』創刊のことが記載されていない。原表は『商務五十年』にあり、転載にあたって編者が増刪を行なったというからけずってしまったのか。そんなことはあるまいと思うのだ。

38) 樽本照雄「目録って何だ」『大阪経大論集』第124号1978. 7. 15。

あった。それに尽力したのが長尾雨山、小谷重、加藤駒二たちであったこと、これまた否定できぬ事実なのである。

では彼らはどういう経緯で上海に行くことになったのか。ことに、長尾雨山は合弁時期をまるまる中国で過ごしているのだ。

この疑問に明解に答えているのは、私の知る限り中村忠行氏の次の文章のみである。

就中、商務印書館は、これ迄、単なる印刷専門の商社であるに過ぎなかつたが、この年（1903年—樽本注）以来、出版にも手を染めることとなり、多年小学校教科書の出版を以て、我が出版界に雄飛してゐた金港堂と提携して合弁組織に改め、新に編輯部を設けると共に、折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を歎つてゐた元高等師範学校教授長尾愼太郎（雨山）を招き、坪内逍遙編『小学読本』³⁹⁾以下各種の教科書をはじめ「説部叢書」・「林訳小説」といつた全集物まで、続々と翻訳・出版したのである。⁴⁰⁾

教科書疑獄事件とは一体何か。

教科書疑獄事件と長尾雨山

1902年（明治35）12月17日、教科書会社と教育関係者の小学校教科書をめぐる贈収賄事件が摘発された。翌日の『万朝報』はその模様を次のように報道している。

教科書肆其他二十余個所を

一斉家宅搜索

動員実に百余名

大疑獄教科書事件 ○昨日午前二時頃、東京地方裁判所宿直検事の手し、何事か通知の達すると同時に、宿直検事には川淵検事正に通報し、其指揮によりて更に羽佐間上席検事、中川上席予審判事に通じ、直ちに予審判事及検事の急召集となり、中川、川島、潮、横村の四予審判事、羽佐間、福井、溝淵、安住、杉本の五検事が八ヶ所に別れて出張し、警視庁よりも警部及刑事巡査数十名同行したるが、右判検事の出張先は下谷、本郷、浅草、日本橋に渉り、被告人として令状を發せられたるは

39) 坪内雄蔵（逍遙）編の教科書は、沙頌寛・張肇熊訳『和文漢訳読本』巻1～4 商務印書館1901年（光緒27）と長尾愼太郎訳巻5～6 商務印書館1904年（光緒30）刊のものが、実藤文庫に所蔵されている。

40) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学」(一)『山辺道』第9号1962.12.25 56頁。

休職祝学官村上幹当（同人は旧三重，石川，静岡の三県に奉職せしもの）及び群馬県群馬郡視学太田鶴雄にして，事件の関係者は金港堂，集英堂，普及舎の三教科書々肆に於ける教科書検定に関する収賄事件なりと伝えられ其家宅搜索を受けたるは前記三書肆は勿論，金港堂側にては営業部長小谷重（下谷々中清水町）運動員中村一郎，藤原佐吉，加藤駒次及び下谷龍泉寺町の金港堂主原亮一郎方，集英堂側は小林清一郎，池部浩三，永田茂，篠塚半蔵，前川一郎，普及舎側は山田禎三郎，速井清，中川九郎等其外合せて廿箇所内外なるが，此件につき昨日裁判所，警視庁より出張したる人員は総て百名近くにて，押収せしものは金銭に関する帳簿及び教育者より来りし手紙名刺などにて其手紙の中には意外なる人の意外なる無心状などあるかも知れずとの事なり⁴¹⁾ ……

世にいう教科書疑獄事件の発端である。

小学校教科書は，1883年（明治16）までは各府県が文部省に採用教科書を届け出るだけの開申制度であったが，民間に雑多な教科書まがいのものが出版されたため，それを認可制度に改めるなど文部省は徐々に規制を強化して行った。1886年（明治19），小学校令で小学校教科書は文部大臣の検定を受けたものに限ることとし（検定制度），検定を通過した教科書を府県で採用するための教科用図書審査委員会を設置することにした。

明治30年代に必要とされた小学教科書は，尋常科4年，高等科4年あわせて1年間2990万冊といわれる。その内訳は，

尋常科 読本（標準価格1冊12銭）800万冊 修身（1冊15銭）400万冊
習字800万冊 計2000万冊

高等科 読本（1冊21銭）180万冊 修身（1冊25銭）90万冊 習字180万冊
地理，歴史，理科各90万冊 図画180万冊 算術90万冊 計
990万冊 総計2990万冊⁴²⁾

という。

「全国の小学教科書に中学，師範等各種学校の教科書を合するとき是一年の売上総額優に四百万円以上に達す可し然るに此教科書は版權所有者の手より小売店に渡す歩合は大概九掛にして製本の実価は三割乃至三割五分に過ぎず故に

41) 『新聞集成明治編年史』第11巻 財政経済学会 499頁。

42) 木村毅「教科書疑獄」(1)(2)『上下財界よもやま史』筑土書房 1957.1.5 初版，2.20 再版。161～162頁。

此両者を併せて四割乃至五割を除くの外は版權者の利益となるものなれば云々」という記事が『大阪朝日新聞』（1902年〈明治35〉12月28日）に記載されており、その利益は膨大であった。しかも、文部省検定済の教科書が府県審査委員会の検討を経て採用されたならば、1887年（明治20）の省令二号小学校教科用図書検定規則三条「検定ヲ経タル図書ヲ教科用図書トシテ用ヒ得ヘキ年限ハ免許証下付ノ日附ヨリ起算シテ五ケ年トス」⁴³⁾により、一府県で5年間にわたる独占権が与えられたと同様であった。

金港堂、集英堂、普及舎、富山房、国光社等20社たらずの会社がしのぎを削って採択をかけ、採用の権限をもつ府県審査委員会に対して贈賄等あらゆる手段を取ったのは自然のなりゆきであった。その中で最大の成功を得ていたのが金港堂である。下に掲げた表は、各府県で修身から唱歌まで、どこ発行のものを採用しているのかの一覧表である。金港堂発行の教科書は64の道府県で採用されており、他を大きく圧倒していることがわかる。

発行者別採用教科書府県数一覧

発行者	教科							合計
	修身科	読書科	習字科	図書科	作文科	算術科	唱歌科	
普及舎発行	16	11	9	2				38
文学社主小林義則発行	2	7	1	25	1	2		38
金港堂発行	20	19	9	11		5		64
集英堂	14	10	6	4		11		45
西沢之助発行（国光社前社長）	6	2						8
富山房		8	5					13
国光社		1	1	1			2	5
阪上半七	2		1			1		4
小野英之助（富山房前社長）	1							1

『大阪朝日新聞』1902年（明治35）12月28日により作成。

教科書売り込みにまつわる醜聞を文部省は放置していたわけではなく、1901年（明治34）、小学校令施行規則に、

43) 宮地正人「教科書疑獄事件」『日本政治裁判史録 明治・後』第一法規出版株式会社 1969. 2. 15初版 10. 20再版 353頁。

第六十三条ノ二 小学校教科用図書ノ審査又ハ採定ニ関シ其前後ヲ問ハス左ノ各号ノ一ニ該当スル所為アル者ハ二五日以下ノ重禁錮又ハ二五円以下ノ罰金ニ処ス
 第一号 直接又ハ間接ニ金錢物品手形其他ノ利益若クハ公私ノ職務ヲ官吏学校職員若クハ運動者ニ供与シ又ハ供与セン事ヲ申込ミタル者又ハ供与若クハ申込ヲ承諾セン事ヲ周旋勸誘シタル者並ニ供与ヲ受ケ若クハ申込ヲ承諾シタルモノ
 (以下略)

第六十三条ノ三 小学校教科用図書ノ審査又ハ採定ニ関シ刑ニ処セラレタル者アルトキハ其ノ者ノ運動ノ目的タル図書ノ審査又ハ採定ヲ無効トス⁴⁴⁾

という2項を追加し贈賄行為を阻止しようとした。

しかしながら、文部省の運動禁止令も始めからその威力を疑われていた。同年1月13日付『報知新聞』は、上記の追加規則を紹介した上で、「改正通り果して之を励行するの手腕、現任当局者に在らば書肆に取りては実際容易ならざる打撃を被るべし⁴⁵⁾ (傍点樽本) と皮肉っているし、事実、「中等教科書売込運動猛烈 文部省の運動禁止令の威力疑はる」(1.13)「文部省の運動禁圧何のその 依然教科書審査の醜怪沙汰」(1.21)という『報知新聞』のタイトル通りのことが行なわれていた。同じく『報知新聞』(1.19)の記事を紹介しておこう。

教科書の運動一斑

教科書問題に関する醜聞は久しきものにて、文部省も之を取締る為め省令を発したるが、事実の上に寸効無く、愛媛県に於ては今回全国に率先して教科書変更の先登を為せり、而して其変更に依り利益を受くるものは都下の書肆金港堂にして、愛媛県視学官寺尾捨次郎、松山中学校長野中久徹、同県政友会支部幹事岩崎一高等の協議にて、旧臘上京中、彼らの旅寓なる八官町の佐々部方に於て金港堂と協商し教科書変更を決したり、此協商に基き、金港堂は金一万円を彼等に提供する筈にて、既に其一割、一千円を手金として納めたりと、其向々にて沙汰せるのみか、尚ほ国光社其他に於ても此徹を踏まん見込にて橋渡しの最中なりと云ふ。⁴⁶⁾

以上のような情況のもとで、教科書会社の一齊家宅捜索が行なわれたのが1902年(明治35)12月17日であった。翌1903年(明治36)3月まで、新潟県知事柏田盛文、宮城県知事宗像政、栃木県知事溝部惟幾、鳥根県知事金尾稜殿、宮崎県知事園山勇、元群馬県知事小倉信近をはじめとして、府県書記官、府県

44) 同上、357頁。

45) 前出『新聞集成明治編年史』192頁。

46) 同上、195頁。

視学官，府県視学，郡視学，師範学校長・教諭，高等女学校長，県会議長，県参事会員，教科書会社社長・社員など，全国規模の一大疑獄事件にまで発展した。

教科書疑獄事件で予審に付された者は152名，公判に入りその後裁判を経て全てが終結したのは1904年（明治37）6月のことであった。最終的には官吏収賄罪69名，恐喝取財犯1名，瀆職法違犯1名，詐欺取財犯1名，小学校令施行規則違犯44名，合計116名で追徴金は7万円に達した。

この事件をきっかけにして，世論は教科書の自由採用と国定化とに分かれたが，文部省はただちに国定化にふみきり，1903年（明治36）4月13日，勅令をもって小学校令を改正，審査委員会を廃止し，国定教科書制度を採用したのである。

1902年（明治35）12月17日の第1回捜索に続いて，同年12月22日，第2回の大捜索が行なわれた。

捜索を受けたのは，文学社，国光社，富山房，帝国書籍株式会社，育英社ならびにその社長・社員らの関係者であるが，新たに拘引された人々の中に，罪名は収賄，高等師範学校教授従六位長尾楨太郎（号雨山）および同じく罪名収賄，金港堂編輯主任正七位小谷重がいた（小谷重が金港堂社員でありながら罪名が贈賄でなく収賄である理由は後述する）。

長尾雨山，小谷重らの裁判経過を『大阪朝日新聞』によって追ってみる。事件は東京で発生しているため，大阪での報道は遅れがちであるし，それほど詳細ではない。であるから『大阪朝日新聞』でなければならぬ理由はまったくくないが，今，私が簡単に閲覧できるのは同紙のマイクロフィルムしかないので，やむを得ない措置なのだ。

1903年（明治36）1月1日，「事実を素直に申立つるものは責付を釈す由にて長尾，永田兩名の外金港堂店員堀田梅太郎も一日責附となり同夜出獄を許されたりと」（1月5日付）「責付」とは，「旧制で，裁判所が被告人を親族その他の者に預けて勾留の執行を停止する」（『広辞苑』）ことをいう。

1月11日付，拘引者一覧表（77名）が掲載され，「東京高等師範学校教授兼因

書審査官(責付)長尾楨太郎(二十二日)」と「元文部省図書審査官現金港堂員小谷重(同)」の名が見える。姓名の後の(二十二日)(同)というのは拘引日という。

1月12日付、「拘引者中大学及び高等師範の出身は左の如し」とあり、大学出身者9名の中に「文学士 小谷重」という記事により、彼が帝大出身ということがわかる。

1月26日付、加藤駒二、取調べらる。加藤駒二の肩書きはいくつかの予審決定書に散見され、帝国書籍(株式)会社取締役あるいは金港堂総務部長となっている。帝国書籍株式会社は、金港堂が、もっともしのぎを削った競争相手の集英堂と、その集英堂の分身ともいべき普及舎とで作った会社で、トラストである。もっとも、従来の出版物はそれぞれのところで発売し、新たに出す教科書をこの新会社で売りさばいたのだという。⁴⁷⁾ 加藤駒二は金港堂の社員として、帝国書籍株式会社に出向していたと思われる。

2月14日、「休職東京高等師範学校教授長尾楨太郎、予審決定の言渡しあり、有罪と決定し軽罪公判に付せらる」「休職」というのは、事件が発覚すると同時に文部省は拘引された嫌疑者に対し、即時、休職を命じたからである。肝心の予審決定書がない。そこで『東京朝日新聞』を見たが、「集英堂より金三百円」が加わっているだけで大同である。ところが2月15日付『時事新報』には詳細な記事が掲載されている。国立国会図書館へ行った甲斐があったというものだ。

香川県香川郡宮脇村大字宮脇土族

休職東京高等師範
学校教授 従六位 長尾楨太郎

元治元年九月生

右長尾楨太郎に対する官吏収賄被告事件に付き予審を遂げ終結決定を為す左の如し
長尾楨太郎の官吏収賄被告事件を東京地方裁判所の軽罪公判に付す

理 由

東京市日本橋区通旅籠町十一番地書肆集英堂小林清一郎は明治三十三年八月中小学校用教科書の検定を文部省に出願したるに同年十一月に至り其出願に際し尋常国語読本其他の者に不認可とならんとする傾向あるを採知し集英堂事務員池辺活三をし

47) 前出木村毅『財界よもやま史話』157頁。

て当時文部省図書審査官たりし被告榎太郎に対し集英堂の出願に係る書籍は其欠点を修正して差出すに付速に検定相成るべき様尽力ありたしと依頼し同月二十三日牛込区佐土原町二丁目二番地の榎太郎の住宅に於て金三百円を贈らしめたるに榎太郎は其内嘱を容れて之を収受したり

以上の事實は証憑十分にして榎太郎の所為は刑法第二百八十四条第一項に該る輕罪なるを以て刑事訴訟法第六十七条第一項後段に依り決定す（傍点原文のまま）

明治三十六年二月十四日

東京地方裁判所予審判事 中川富太郎

2月16日付、拘禁者一覧表（140名）高等師範関係者は、長尾榎太郎のほか、教授本莊太一郎、教諭増戸鶴吉の名が見え、金港堂では主人原亮一郎、編輯員小谷重ほか7名が拘禁されている。

3月10日付『時事新報』には長尾榎太郎の公判の様子が詳しく報道される。長尾側の反論を知る上で重要な部分であるので長くなるが引用する。

次に高等師範学校教授従六位

長尾榎太郎

の審問に入る、検事は犯罪事実を述べて曰く被告は文部省図書検定審査官在職中三十三年八月の中集英堂より文部省に請願したる国語読本が不認可となるべき傾向ありしより社員池部活三をして被告を牛込区佐土原町の住宅に訪はしめ認可となるべき様尽力し呉れと頼み金三百円を送りしに被告は之を収受したる者なり云々（裁）被告は文部省の図書審査官を勤めしことありや（被）あり（裁）集英堂主小林清一郎を存じ居れりや（被）知らず池部活三は知れり（裁）三十三年十一月中池部が被告宅を訪問せしことありや（被）九月か十月頃来りしと思へり（裁）其来りし当時被告は集英堂が文部省に国語読本検定の出願中なりしことを承知し居りしか（被）審査官は兼任なりしのみか自分の担当は中学校の漢文及び小学校の習字の分なりしを以て集英堂の出願は一向知らざりし（裁）池部が被告宅へ行きし時国語読本の話をしてしたりや（被）左様の話はなかりし（裁）然らば如何なる用向きなりしか（被）集英堂にて編纂中ないし読本中の文章を修正して貰ひたしとて来りしなり（裁）其頼みを受けたりや（被）再三断りたるに立つての頼み故止むを得ず承諾したり

（裁）其修正は何時頃出来上りしや（被）四五十日を要したり（裁）活三は一度頼みに行きしのみなりや（被）然り（裁）其修正を為すに就て報酬の約束ありしか（被）なし（裁）其後報酬を持参せしか（被）余程時経て持参したり（裁）金額は（被）三百円なりし（裁）何と云ふて持参せしか（被）別に何とも云はざりし（裁）一体審査官は著述を為すことを得ずとの定めあるに非ずや（被）自分は嘗つて承知せず

ここまでが事実の審問である。それにしても、検定通過が危ういと見た教科書

を編集中のものといいつくろい修正を依頼するなぞ集英堂も考えたもので、まさに英知を集めておる。長尾雨山の図書審査官としての担当は、中学の漢文と小学の習字だから国語読本とは関係ないと考えた所に落とし穴があったのではないか。つづいて、長尾側の弁解がある。

以上にて事実の審問を終りつて調書の朗読を済まし弁護人より文部省へ第一図書検定の順序第二被告長尾の担当せし課日第三国語読本は何人の担当なりしか第四被告は国語読本の検定を為したることありやを照会し尚ほ検定済みの国語読本を御取寄せありたく及び池部活三を証人として喚問ありたしと申請し安住検事は何れも賛同することを得ずと陳じ裁判長は合議の上『東京朝日』によるとここまでで午後5時30分一時休憩す——樽本注)何れも必要なしとて却下の決定を与へ直ちに弁論に入れり検事論告の要旨は本件は集英堂の前川池部等が出願の読本を修正して再び差出すに当り被告に検定済みとなる様尽力し呉れと頼み金三百円を被告に贈りたる者なり然るに被告は他の読本の修正を依頼され報酬として三百円を受取りたりと弁解すれども仮りに此弁解を真なりとするも同じく犯罪を構成する者なりと思考す何となれば審査官たる者が今検定せんとする教科書に筆を入るゝと云ふは実に不都合のことにして現に主務省にては当局官吏に対し一切書肆の依頼に応じ著述等を為すべからずと訓令したりと云ふ然かのみならず池部前川等の供述に依れば修正の報酬は云ふ迄もなく検定通過の報酬も込め置きたる考へなりとなり故に何れの点よりするも刑法上の責任は免れ得べき者にあらずと信ず依て被告を刑法第二百八十四条に照し相当の判決ありたしと云ふにあり弁護人は之に対して被告が三百円を受取りしとの事實は明かなることなるが此三百円は修正の報酬として受取りし者にして決して検定通過の報酬として受取りし者にあらず仮りに池部等の云ふが如く検定通過の報酬も込めありしとするも被告は如何にして其次第を知るべき余地あらんや尚一步を被告が受取りし金円は検定に関してなりとするも被告は漢文習字の審査担当なるを以て他の国語読本に関して収賄したりとするも這は法律上罪として論ずべき者にあらず故に被告に対しては無罪の宣告ありたしと云ふにあり裁判長は追て判決を言渡すべき旨を告げ閉廷せしは午後七時なりき

金銭の授受は認めるが、それが教科書の修正料か検定通過のためのワイロか、それが問題だ。長尾雨山にしてみれば、審査の担当科目が違う以上、修正料としか考えるほかなくまた事実そう信じていた。検事側はそれより一枚うわ手で、長尾雨山の図書審査官という立場を問題にしたわけだ。

3月17日付『東京朝日新聞』「▲裁判宣告 昨日左の宣告ありたり 東京高等師範学校教諭長尾楨太郎 重禁錮二ヶ月、罰金七円、追徴金三百円」

3月17日付、小谷重子審決定

株式会社金港堂編輯部長 小谷 重

明治七年六月生

第一、集英堂主人小林精一郎は明治三十三年十月中尋常小学校用教科書の検定を文部省に出願したる所同年十一月上旬文部省図書科に於て右出願に対し不認可の指令を為さんとすの議ありしに因り当時文部省図書審査官にして図書課長たりし被告小谷重は小林精一郎に対し書面を以て其旨を内報したり精一郎は大に驚き神田区今川小路一番地の被告宅を訪問し教科書の欠点を修正して差出すに抛り速に検定相成るやう取計はれたし検査通過の上は相当の謝礼をなすべしと申込み其後検定済となりたるを以て翌三十四年四月中旬金三百円を前記被告の宅に持参し差出したるに被告は收受したり

第二、国光社長西沢之助は明治三十三年十月中高等小学国語読本の検定を文部省に出願したる処其後検定通過の困難なるを探知し同年十二月中社員森房澄江及被告の親族村上八太郎を以て被告に対し読本の修正及び其検定通過を依頼し若し検定通過の上は相当の報酬をなすべき意を通ぜしめたるに被告は其意を了し読本の修正を為して澄江に交付したるを以て沢之助は同年十二月二十九日追願をなし翌三十日同じく検定認可を得たり依りて沢之助は明治三十四年二月中社員川義直衛及森房澄江を前記被告宅に遣し袴地（仙台平）一反金三百円を被告の妻とみに交付せしめたるに被告は之を收受したり（傍点原文のまま）

小谷重の場合、金港堂社員となる前の文部省図書審査官時代の行為を問われたもので、故に罪名は贈賄ではなく収賄なのである。親族までを動員しての出版社側の攻勢のすさまじさがうかがえる。また、出版社にとって直接の監督庁である文部省の図書審査官を自社に引き入れるなど、現在の官僚の民間会社への天下りと何らかわるところはない。

3月18日付、「過日公判言渡ありたる長尾楨太郎、岩屋直次郎は本日控訴の申立をなしたり」

3月25日付、元文部省図書審査官金港堂編輯長小谷重に対して、重禁錮二月十五日、罰金十円、追徴金三百円の裁判が宣告される。

3月29日付、長尾楨太郎の控訴公判がひらかれる。「長尾楨太郎は金銭を受領したるは事実なるも収賄にあらず校閲料なりと信ぜり証人とし渡辺図書課長を喚問する事文部省へ照会の事を許され午後四時閉廷せり」

5月10日付、「高等師範学校教諭長尾楨太郎、宮城県視学田淵清市兵衛の控訴は孰れも棄却」

以上が、中村忠行氏のいわれる、「柄折教科書疑獄事件に失脚して悲運を歎つてゐた元高等師範学校教授長尾慎太郎」のその「悲運」をつくりだした直接の事件なのである。

長尾雨山著『中国書画話』（筑摩書房1965.3.10）には著者略歴が付されており、ここに全文を引用する。

著者略歴

- 一、長尾甲、字は子生、通称慎太郎、雨山、石隠、无悶道人、睡道人などと号し、書齋を无悶室、何遠楼、思齐堂、艸聖堂、漢碑齋、夷白齋などと称し、居を猗々園、蘆中亭、栝園などといった。
- 一、元治元年（1864）九月一八日、讃岐高松藩士・長尾柏四郎勝貞（号・竹畑）の長子として高松で生まれた。幼時から父に従って漢学を修めた。
- 一、明治二一年（1888）東京帝国大学文科大学古典講習科を卒業。学習院教師。文部省専門学務局勤務。
- 一、同 二二年（1889）東京美術学校教授兼務。
- 一、同 三〇年（1897）第五高等学校教授。
- 一、同 三二年（1899）東京高等師範学校教授、東京帝国大学文科大学講師。
- 一、同 三六年（1903）上海に移住、商務印書館に入り、編訳を主宰。
- 一、大正 三年（1914）帰朝し京都に寄寓。
- 一、同 八年（1919）平安書道会副会長に就任。終身その任にあった。帰国してより没するまで講学、著述、揮毫に従い、詩文では偶社を主宰するほか、景社、芸文社に顧問となり、泰東書道院、日本南画院、日本美術協会、大東文化協会などにも参与した。
- 一、昭和一七年（1942）四月一日 京都市上京区西洞院丸太町上の寓居で病没。吉田神楽岡の神葬墓地に葬る。享年七十九。遺著に何遠楼詩文集、古今詩変、儒学本論、楚辞講義、聖教序講義、古詩源講義などあるが何れも未刊。⁴⁸⁾

また、書中の「序」（神田喜一郎）および「解説」（吉川幸次郎）の長尾雨山の経歴に関する部分を長くなるが引用する。私のまづい文章で抄録するよりはよほど長尾雨山の為人をよく伝えると考えるからだ。それと同時に、長尾雨山について書かれた文章ははなはだ少ないためもある。

先生（長尾雨山——樽本注）の東京帝国大学における同学には甲骨学を以て知られる林泰輔、『史記会注考証』の大著を遺した瀧川亀太郎の諸博士があった。先生は特に文学の研究に専念し、当時から天稟の詩才を謳われた。たまたま清国の公使

48) 長尾雨山『中国書画話』筑摩書房1965.3.10 筑摩叢書27 379頁。

館員として東京に来任してきた鄭孝胥を驚かした逸事は余りにも名高い。また岡倉天心と肝胆相照し、明治二十二年には天心と共に東京美術学校の創立に尽力し、その教授となり、更に雑誌『国華』の発刊にも多く画策せられた。その後、熊本の第五高等学校教授として同地に赴任し、夏目漱石と同僚であった。当時先生は漱石と親交を結ばれ漱石も先生に漢詩の添削を乞うたという。同三十二年に東京高等師範学校教授に任じ、東京帝国大学講師を兼ねられることになったが、三十六年、遠く上海に移住、同地の商務印書館に入って、編訳事業を主宰、革命前の中国初中等教科書の編纂は、専らその手に成った。大正三年の末に帰国、京都に居を卜し、爾來、昭和十七年四月に病没せられるまで、優游自適、専ら詩書三昧の生活をおくられた。京都時代に主として往来せられたのは、内藤湖南・狩野君山・西村天因・鈴木豹軒、等の諸博士で、東京時代以来の旧友が多かった。⁴⁹⁾ (神田喜一郎)

中国人との交遊また共働が、最も密であったのは、本書の著者長尾氏であるように見える。明治の初年、東京で白面の書生であったころの長尾氏が、清国公使館を訪問したときの逸話を、私はかつて狩野氏からきいた。大清帝国の公使黎庶昌は、長尾氏が、ひとえの着物をきているのをいぶかり、寒くはないかと、筆談で問うた。長尾氏は即座に筆を走らせ、昂然と答えた。「寒士ハ寒ニ慣ル、ナンゾ衣ノ単ナルヲ怕レンヤ」、寒士慣寒、那怕衣単。突差の応答が、寒、単と、韻をふんでいるのに、公使は驚倒した、と。⁵⁰⁾

そうして長尾氏は、駐日清国外交官の一人と、終生の刎頸の交わりをむすぶ。鄭孝胥氏であって、やがて今世紀中国旧詩壇の驍将となった人であるが、若い二人の交遊は、東京ではじまった。当時の鄭氏の詩の一節にいう、「此の都にて文士と号するものは、浮躁にして多くは実ならず。盛名あること頼襄の如き、語助もまだ完悉ならず」。「其の粗ぼ可なる者を求むれば、百に未まだ一つを得ず。吾れに善きものに長尾有り、後より起こるも実に美質」。長尾氏の漢文の文法の正しさは、頼山陽の及ぶところでない、というのである。／更にまた明治の末、長尾氏が、中国の出版社、商務印書館の顧問として、上海に赴き、大正三年、帰国して居を京都に卜するまで十二年間、その地にいたことは、中国人との交遊を、質量ともに増大した。当時の商務印書館は、中国最大のまた最も権威ある出版社として、旧友鄭孝胥が同僚であるのをはじめ、清末民国初における知識人の重要な拠点の一つであったが、長尾氏は、編集の業務について発行するばかりでなく、時務についても献言した。たとえば、軍事教練を学校の正課としようとする意見に対し、それより農業技術の改革こそ急務であると、説いた。また詩社を作って、人人と唱和したのが、上海の詩社のはじまりであると、いずれもあとでのべるように、京都東山の酒樓で私が奉

49) 長尾雨山『中国書画話』筑摩書房1965. 3. 10 筑摩叢書27 3~4頁。

50) 同上、360頁。

手した際の談資である。／かくてその名声は、「滬上」の芸林にさわがしかった。十二年の長い滞留をおえて、いよいよ帰国しようとするとき、鄭孝胥氏が賦した送別の詩の冒頭にはいう、「江戸の旧遊は夢寐に非ず、眼前の雨山は嘗つて同じく酔いしひと。人間の陵谷は事驚くに堪えたるも、恙無き吾れ儕は黙して相対す」。それから更に十五年、昭和三年、日本に來遊した鄭氏が、京都に隠棲する長尾氏に贈った詩の冒頭にはいう、「雨山は君子人、老いに垂んなんとして愈いよ豈弟。交期四十年、白首にして易らざるを見る」。鄭氏が、その最晩年、満洲国の重臣となるに至るまで、もっとも信頼し尊敬したのは、この異邦の友人であったように見える。／要するに長尾氏は、単に中国文明の外からの同調者であったのではない。中国の一流人とおなじ活動を、内がわから彼等と共にしたのである。⁵¹⁾ (吉川幸次郎)

日本長尾雨山「対客問」(第一～四)と題する漢文が、『東方雑誌』の創刊号から第3期までと第5期の4回にわたって連載されている。

「対客問」第一において、中国の現状を分析して、亡徴(亡びのあらわれ)と興兆(興るきざし)のふたつにわけける。外国に学ぶ有志の士がいる、敵国外患がある、各省で武備学堂を建てている、教育章程を定めた、人口が多い、勤勉だ等興兆を10条あげ、積弊のあること、民心不安のこと、国家財政の歳出超過のこと、民が食えていないこと、交通を外国人に握られていること等亡徴を10条挙げる。

続く第二では、国家の経営には、教育、産業、交通、財政、兵制、法律、行政、風俗の八事が土台となるが、これを妨げているのは満洲族、漢族という種族の争いである。しかし、今は昔ではない。種族は異なっていようとアジア人種であり黄色人種なのである。民心を一にし、挙国一致してはじめて八事についても言うことができる、という。

第三において次のようにいう。今、政治を言う者に保守と変法がいる。保守はその興の面のみを見、変法は亡の面のみを見る。しかし、臨機応変にならねばならぬ。国の本は民にある。民心が離反しているのに上のみがひとり存在しているなど古来よりないことだ。旧弊を破り、新智を開くためには教育より始めるはかない。奏定学堂章程を読んだことがあるが教育の公理に合わぬものが一ならずあり、往年政府は各省に学堂を興すよう下令したが、まだ一、二を設

51) 長尾雨山『中国書画話』筑摩書房1965.3.10 筑摩叢書27 361～362頁。

けただけでそれも高等専門を先となし、いわゆる国民普通教育は漠としている。国の強弱は兵の強弱によるとはいえ、究局には民智が開けているかないかによる。

第四の結論部分では、国民教育の普及を力説する。国民教育は国家の利であり、ただ人民の利だけではない。今、中国の時務を言う者は、強兵強兵となえるが、兵の本は民にあり、民の本は教育にあることを知らぬ。農であれ工であり商であれ、教育があってその業は大いに発展し、その利は大きく開く。欧米が富で世界を圧しているのもこれである。教育を興すは百利あって一害もないのだ。

国民教育の普及という点に的を絞った論述であり、部分的に異論はあろうとも、明確な論旨とそれを構築している文章力等、作者の力量を遺憾なく示している論文である。

何もない時であれば、審査担当が異なるから国語読本の校閲料であって検定通過のためのワイロではないという主張も認められたであろうが、時期が悪い。教科書疑獄事件の最中である。当時の裁判官を納得させることができなかつたのは長尾雨山の「悲運」であろう。その「悲運」はまことに冷酷に、文章に残されないという形で残されている。その文章とは前出『東京高等師範学校沿革略志』である。

「其の材料は主として文部省並に本校の記録文書に抛り傍ら実歴せる人の記憶を参考したるものなれば其の大体に於ては正確なるを失はざることを信ずるなり」という校長嘉納治五郎の「序」をいただく同書には、長尾甲、榎太郎、雨山の名はどこにも見当たらないのである。つまり、公式記録から長尾雨山の存在は抹殺されているのだ。

同書は、職員の移動について煩雑なくらい詳細に記している。1899年（明治32）、長尾雨山が高等師範学校の教授になった年前後の職員は次のようである。

明治三十一年より同三十四年に至る間に、新に教官・講師となりし人人は、三十一年に大瀬甚太郎・佐藤伝蔵・国枝元治・磯田良・中川謙二郎（幹事、三十三年転任）村上直次郎（三十二年解職）、三十二年に熊本謙二郎（三十五年転任）桑原隲蔵・登張信一郎・松本孝次郎・上原六四郎（元附属東京音楽学校主事）熊谷五郎（三十五

年罷む) 蟹江義丸・吉田弥平・亀高德平・小泉又一(附属小学校主事, 三十三年海外留学) 中川銓吉(同年海外留学) 高倉卯三麻呂・岸本能武太(三十五年非職) 川村理助(舎監, 幹事, 三十三年辞職) 朝夷六郎(幹事, 三十三年転任) 岩元禎(三十五年罷む) 林泰輔(三十三年罷む) 奈佐忠行(三十五年罷む) 沢村真(三十三年罷む) 石川成章(三十五年解職) 松井簡治・小山正太郎・清水武定(三十五年罷む) 三十三年に森本清藏(附属小学校主事, 三十五年転任) 近藤清次郎(三十五年解職) 法学博士金井延(三十四年罷む) 法学博士木場貞長(同上) 文学博士井上哲次郎・法学博士梅謙次郎・文学博士松本亦太郎・失津昌永・遠藤隆吉・佐々木祐太郎・野田貞・山田源一郎・メルトン・シー・レナルド(三十六年解約) ジョン・トラムブル・スキフト, 三十四年に理学博士齋田功太郎(帰朝復職) 榑保三郎(三十五年解雇) 平田喜一・片山寛・三矢重松・桜井寅之助・峯岸米造・青柳篤恒・林鶴一・武島又次郎・本荘太一郎(兼舎監, 幹事, 三十五年罷む) 井上十吉・長谷川乙彦等なり。⁵²⁾

教科書疑獄事件で拘禁された本荘太一郎の名前が見えるのに、長尾雨山はまったく無視されている。ゆえに、『東京教育大学百年史』でも同様に無視する。実藤恵秀氏ではないが、これこそ「甚だ科学的ではない」。

金港堂が商務印書館と合弁組織になる直前に教科書疑獄事件が発生し、正式に合弁会社となった1903年(光緒29, 明治36)に金港堂は自社の惹起した事件で失脚した長尾雨山およびその時は金港堂社員であった小谷重, 加藤駒二を商務印書館に派遣した。そうして三名は、中国人むけの教科書の編訳に手腕を発揮することとなった。

たしかに教科書方面での日中協力は緊密なものではあったが、さらに一歩進めて、当時商務印書館が創刊しはじめていた『繡像小説』に日本文芸の影響が見られないか、というのが次なる問題である。

『繡像小説』中の翻訳小説

『繡像小説』は、1903年(光緒29, 明治36)5月創刊された。金港堂, 商務印書館合弁の年である。半月刊, 全72期で1906年(光緒32, 明治39 推定)に停刊するまで, 李伯元「文明小史」60回, 「活地獄」39回, 劉鉄雲「老殘遊記」13回, 吳趸人「瞎騙奇聞」8回, 歐陽巨源「負曝閑談」30回, 周桂笙「世界進化

52) 前出『東京高等師範学校没革略志』63~64頁。

史」22回等、錚々たる作品が連載されている。この『繡像小説』には、また少なからぬ翻訳小説が掲載されているが、それらの原典と翻訳の経路を完全にたどることは、今の私には困難である。そこで、すでに発表されているそう多くはない論文を参照するが、ここでは中村忠行氏の諸論文、特にそのうちの「清末の文壇と明治の少年文学」⁵³⁾(一)(二)、「忘れられた清末の翻訳文学二三」⁵⁴⁾、「清末探偵小説史稿」⁵⁵⁾(一)および中島利郎氏の「晩清の翻訳小説——華訳日文小説編年目録初稿——」⁵⁶⁾(1)(2)を利用させてもらおう。ただしリストを組みかえるという操作だけでは芸がないので、原物にあたることのできるものには出来るだけ当たったが、それほど多くはない。比較の都合上、発行年は西暦を使う。

まったくの翻訳ではないが、李伯元の「新編前本経国美談新戯」（謳歌変俗人の筆名を使用、1～34期 1903.5～1904.9）は、矢野竜溪のもの華訳本（『清議報』に連載）によったという。

もうひとつ、小説ではないが、坂下亀太郎著・訳者不記の「理科游戲」（1～2期 1903.5～6）という啓蒙科学読物があるが、原作は不明である。

荷蘭達愛斯克洛提斯著・訳者不記「夢遊二十一世紀（紀西歴紀元後二千零七十一年事）」1～4期 1903.5～7

原作はディオスコリデスの『紀元二千六十五年——一名未来の瞥見』Dioscorides, Dr. Pseud "Anno 2065., een Blik in de Toekomst" 1865. 華訳はベッカーズ (Dr. Alex. V. W. Bekkers) の英訳再版本によったらしい。『繡像小説』連載のものは転載で、楊徳森訳・楊珈統校閲『夢遊二十一世紀』が商務印書館より先行単行本化されている。日訳には、上条信次訳『開化進歩後世夢物語』（奎章閣 1874. 10）および近藤真琴訳『新未来記』（青山清吉1878. 12）があるが、いずれも華訳の底本ではないという。

戈特爾芬美蘭女史著・訳者不記「小仙源（原名小殖民地）」3～16期 1903.6～1904.4.1

53) 41) に同じ。『山辺道』第9号1962. 12. 25, 第10号1964. 1. 25。

54) 中村忠行「忘れられた清末の翻訳文学二三」『野草』第22号1978. 9. 1。

55) 中村忠行「清末探偵小説史稿」(一)『清末小説研究』第2号1978. 10. 31。

56) 中島利郎「晩清の翻訳小説——華訳日文小説編年目録初稿——」(1)(2) 関西大学大学院文学研究科院生協議会『千里山文学論集』第15号1976. 4, 第16号1976. 10。

原作はヴィースの『スイスのロビンソン』Johann Rudolf Wyss “Der Schweizerische Robinson” 1813-20. 英訳 “The Swiss Family Robinson” からの訳という。

著者・訳者とも不記「華生包探案」4～10期 1903.7～10

原作はコナン・ドイルの『シャーロックホームズの思い出』Arthnr Conan Doyle “The Memoirs of Sherlock Holmes” 1894 で、11篇の短篇の中から次の6篇を華訳している。

The “Gloria Scott”	哥利亞司考得船案	4～5期	1903. 7
Silver Blaze	銀光馬案	6期	1903. 8
The Yellow Face	孀婦匿女案	7期	1903. 8
The Musgrave Ritual	墨斯格力夫礼典案	8～9期	1903. 9
The Stockbroker's Clerk	書記被騙案	9期	1903. 9
The Resident Patient	旅居病夫案	10期	1903. 10

私は、「繡像小説総目録」⁵⁷⁾を作成した時、本文と目録に字句の異同がある場合、本文にもとづくことを原則とした。『繡像小説』第8期と第9期に連載された「華生包探案」は、目録は「墨斯格力夫礼典案」であり、本文の方は「銀光馬案」となっていた。その時は原典に当る努力をせず、原則にてらしてそのまま総目録には「銀光馬案」と記入してしまったが、このたび調べてみると本文の方が間違いで、目録の通り「マスグレーヴ家の儀式」の方が正しいことがわかった。訂正しておく。

英国司威夫脱著・訳者不記「僬僥国」(第8期より「汗漫游」と改題) 5, 8～71期 1903.7, 1903.9～1906.3

原作はジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』Jonathan Swift “Gulliver's Travels” 1726. 日本で『ガリヴァー旅行記』が翻訳されたのは、1880年(明治13)の片山平三郎口訳・九岐晰筆記『鶯璣罽兒回島記』薔薇楼であるが、これはリリパット(小人国)の部だけであり、『繡像小説』のものは全四篇、フウイヌム国(華訳では海黒姆)までを収めている。

奥国維也納愛孫孟著・訳者不記「環瀛誌陰」5～25期 1903.7～1904.5

原作不明。

著者・訳者ともに不記「天方夜譚」11～55期 1903.10～1905.8

華訳の原典は、バートン版『アラビアン・ナイト』Sir Richard Burton “Arabian Nights' Entertainment” という。

著者・訳者ともに不記「俄国包探案」21～22期 1904.3

原作不明。中村忠行氏は、水田南陽訳「露国怪物探偵魔王」『中央新聞』1904.1.1

57) 樽本照雄「繡像小説総目録」『大阪経大論集』第93号1973.5.15。

と関係あるか、と述べられている。よく似た題名に齋藤弔花「露国の軍事探偵」『神戸新聞』1904. 2. 11～5. 22 があるらしいが、『繡像小説』の発行時期から見て無理か。

美国威士原著・訳者不記「政治小説回頭看」25～36期 1904. 5～10

原作はベラミーの『顧みれば』Edward Bellamy “Looking Backward 2000-1887” 1888.

李提摩太 Timothy Richard 訳『百年一覚』広学会 1894 からの転載か。

以上はいずれも欧米原作から直接中国語訳あるいは重訳したものであるが、以下、日本語よりの訳、重訳がふえる。

日本青軒居士原著・訳者不記「珊瑚美人」27～41期 1904. 6～1905. 1

原作は三宅彦弥『珊瑚美人』東京三友堂1895. 12. 21 (国会図書館蔵)

実藤文庫に『政治小説珊瑚美人』三宅彦弥訳・中国商務印書館編訳所重訳 説部叢書2集5編1905. 4 首版9再版 というのがあるが、『繡像小説』連載のものと同一である。

德国蘇德蒙原著・訳者不記「売国奴」31～48期 1904. 8～1905. 4

原作はズーダーマンの『猫橋』Hermann Sudermann “Der Katzensteg” 1889.

登張竹風(信一郎)訳『売国奴』金港堂書籍株式会社 1904. 9. 15 があり、実藤文庫所蔵の『売国奴』は登張竹風訳・呉禱重訳商務印書館説部叢書初集16編1903年(光緒29)刊、1914年4月再版とある。これも『繡像小説』のものと同一である。呉禱重訳の方が、登張竹風訳のものより早く出版されているという奇妙な事情については後述する。

美国愛克乃斯格平著・訳者不記「幻想翼」53～55期 1905. 7～8

原作不明。

著者・訳者ともに不記「三疑案」60～62期 1905. 10～11

原作はパロネス・オルツィの第2短篇集『ミス・エリオット事件』Baroness Orczy “The Case of Miss Elliott” 1905 で、全12篇中の3篇が訳されている。「隅の老人」もののひとつ。

The Case of Miss Elliott 伊蘭案 60期 1905. 10

The Housing of Cigarette 雪駒案 61期 1905. 10

The Lisson Grove Mystery 跛翁案 62期 1905. 11

星科伊梯撰・日本国山花袋訳・呉禱重演「燈台卒」68～69期 1906. 2

原作はシェンケーヴィッチ Henryk Sienkiewicz の ‘Laternik’。

田山花袋訳「灯台守」は、『太陽』第8巻第2号 1902.2.5に掲載。

馬克多槐音著・日本抱一庵主人訳・呉禱重演「山家奇遇」70期 1906.3

原作は、マーク・トウェインの「カリフォルニア人の物語」Mark Twain ‘The Californian’s Tale’ 1893.

原抱一庵訳（抱一庵主人訳と雑誌には記される）「山家の恋」は、『太陽』第9巻第1号 1903.1.1に掲載。

葛維士著・日本文学士中内蝶二訳・呉禱重演「理想美人」71～72期 1906.3～4

原作不明。Charles Garvice 58) (1833～1920) の作品か。

科楠岱爾著・日本高須梅溪訳意・呉禱重演「軍事小説 斥候美談」(b)(中)(f) 72期

1906.2

原作はコナン・ドイルの『勇将ジェラルルの冒険』Arthur Conan Doyle “Adventures of Gerard” 1903 のうちの「准将が狐を殺した顛末」‘How the Brigadier Slew the Fox’。

高須梅溪訳「大佐の罪」は、『太陽』第10巻第10号 1904.7.1に掲載。

日本の作品も訳されてはいるが、日本語からの重訳が多い。しかし、その訳者は呉禱のみであり、それも雑誌『太陽』からの訳である。雑誌『太陽』からの翻訳が多いというのは、金港堂と商務印書館が合併会社であったからという理由よりも、呉禱がたまたま編訳所にいたらしいということに起因しているのではないか。

唯一、金港堂——商務印書館ラインがなければ成立し得ないのが、ゾーダーマン著『猫橋』の訳である。呉禱重訳の単行本発行が1903年で、『繡像小説』連載開始が1904年8月であり、いずれも金港堂発行の1904年9月15日より早い。

登張竹風が、1899年（明治32）9月5日、高等師範学校教授に任ぜられていることは、前出『東京高等師範学校沿革略志』引用部分に登張信一郎の名が見

58) 「Garvice [gá:vis], Charles (1833–1920) イギリスの大衆小説家・劇作家。その小説は *Eve* (1873), *Her Heart’s Desire* (1900), *Just a Girl* (1902), *Linked by Fate* (1905), *Love the Tyrant* (1905), *The Waster* (1919) など」 斎藤勇『増訂新版研究社英米文学辞典』研究社出版株式会社 1961.11.20。

えることにより確認できる。1899年とはまさに長尾雨山が高師教授となった年である。登張は、1906年(明治39)、ニーチェの超人思想を説いたことが不敬にあたるとの圧力があって依頼免官となるまで7年間、高師の教師をつとめている。長尾雨山は1902年(明治35)12月22日拘引されたことにより休職となっているから、ほぼ3年余り登張と同僚であったことになる。

登張竹風が訳稿の段階で長尾雨山に見せ、それを長尾が呉禱に重訳させたのではなかろうか、というのが中村忠行氏のご教示である。

登張竹風の訳が出されたのも金港堂からであり、これまでずっと金港堂——商務印書館の関係で考えてきたが、ここで角度を変えてみる。長尾雨山と登張竹風の関係がまずあって、長尾雨山がたまたま商務印書館編訳所に在任していたから、「売国奴」の訳稿をまわしたとも考えられるのではないか。つまり、金港堂——商務印書館という組織的なつながりよりは、個人的な人間関係の方がより強いのではないか、ということなのだ。呉禱の翻訳は雑誌『太陽』からのものが多いが、当時金港堂は『文芸界』という文学雑誌を発行しており、なぜ呉禱が『文芸界』から作品を選んでいないのか不思議である。「灯台守」は田山花袋訳(『太陽』掲載)のほかに、浅野和三郎訳のものがあり、これが金港堂の『文芸界』第2巻第2号1903.8に発表されている。時期的には充分『繡像小説』に間に合うが、そうはなっていない。

『東方雑誌』創刊号に「日本金港堂図書発售告白」つまり広告が商務印書館名で出されている。その文面に、「本館(商務印書館——樽本注)は、日本金港堂図書会社は日本において設立は最もふるく、刊行する図書は流行し、全国の声望はもとより著名なることを知る。特に定約し金港堂発行の書籍図書はすべて出版されるや即時に発送の代理を行なう云々」とあり、合弁会社となっていながら何となくよそよそしい。これはどういうことか。

原安三郎氏からの手紙

永沢金港堂永沢信義氏にお話をうかがった時、原安三郎氏が金港堂の残務整理をされたことを教えて下さった。90歳をすぎた御高齢であることも同時にう

かがい、ともかく、金港堂と商務印書館の合併問題について何かお書きになったものはないか、手掛りを与えて下さるようお願いの手紙を書いた。

原安三郎氏は、1884年（明治17）3月1日徳島市生まれ、今年95歳。1909年早大商学部を卒業後、山本条太郎（当時三井物産常務取締役）の個人的に関係する事業を手伝いながら、経営者としての修練を積む。「(19)10年茨城県所在の薬丸金山の会計係を命ぜられたのを手はじめに、福島県の硫黄山、出版社の金港堂などの経営や整理に従事。山本は14年三井物産を辞めて独立するが、山本の関係した事業のうち経営不振のものはすべて原が整理・立て直しに当たり、ボロ会社立て直しの名人と呼ばれた」⁵⁹⁾日本火薬製造会社の社長となり、その他数十の会社の重役をかねる。戦後、経団連常任理事、経団連防衛生産委員会火薬委員会委員長、通商産業調査会会長、東京商工会議所理事、国鉄諮問委員会会長、関税率審議会会長などに就任し、日本財界の大長老として重きをなすという。

ほどなくお返事をいただいた。原安三郎氏（同姓ではあるが安三郎氏は徳島市出身で、金港堂の原一族とは無関係）は、明治末期に金港堂の当時の経営者より依頼されて社長となり、数年間整理を行ない復旧した上で社長を退き、原亮三郎、原亮一郎等一統に返却したという。金港堂と商務印書館について次のように書いていらっしゃる。

「当時原亮三郎（原家中心）が個人で上海^{上海}印書館に投資し、長尾雨山先生が現地に定住し経営しておりましたが金港堂との投資関係はありませんでした」（1979.6.26付）

原亮三郎個人の投資で、企業間の投資ではない、とおっしゃるのだ。驚いた私は、つづけて小谷重、加藤駒二も原亮三郎が個人で派遣したのかと重ねておたずねすると、

「加藤駒二、小谷重両氏皆金港堂書籍会社に勤務せし方々で、加藤駒二さんは経営面で金港堂の専務に与つた事もあります。小谷重氏帝大出の文学士であつたと思ひますが、商務印書館の役員（取締役）に原亮三郎翁に頼まれて移住

59) 『現代人物事典』朝日新聞社 1977.3.1 1074頁。

した事があると思ひます。加藤氏上海に居つたかも知れぬが本務は金港堂本社在勤でありました」(1979.7.3 付)

ということである。

原亮三郎個人で投資を行ない、それにとまなり人事も彼個人の立場で取り計らったという事実が明らかとなった。

正式な合弁とはいえ、企業間の合弁ではなく個人(金港堂の中心人物ではあるが、当時すでに社長の座は息子亮一郎に譲って久しい)の投資であれば、外務省外交史料館に公文書として書類が存在しないのも理解できるし、何と云つても『繡像小説』あるいは『東方雑誌』に見られるようなよそよそしさというのも納得いく気がする。たしかに、『東方雑誌』の教科書の広告も、金港堂との提携をうたっているのではなく、小谷重、長尾嶺太郎個人の招聘をいっているのだ。

ではなぜ原亮三郎が商務印書館に投資する気になったのかという問題である。

ひとつには原亮三郎の教育に対する関心であろう。

「君は徒に教育書肆と称すべき人にあらず教育の實際に於て最も熱心なる人なり明治十一二年人尚未た教育の事を口にせざる時に於て君は既に西村貞氏等と相謀り東京教育会を組織し労力と費用とを惜まず大に教育の普及策を講し其後全会が漸次拡張して大日本教育会と改称するや君は其資金として年々三百円を寄附し以て全会の益々発達せんことを図りしに云々」⁶⁰⁾

「明治二十年海防費献金の挙あるや洪沢栄一氏等君を説ひて献金あらんことを勧告せしに君は教育普及の急は尚ほ海防の急に勝れりとなし則ち海防費に献納すべき金員を以て帝国大学及高等商業学校に寄附して学生の貸費に充てり則ち大学に寄附するものは年額一千円にして商業学校は三百円なり」⁶¹⁾等を見ればその関心が中国へ向つたとしても不思議はない。

もうひとつ、当時中国の新教育勃興に対する日本側の関心も深かつたこと、つまり時代の風潮というのが原亮三郎を商務印書館投資に導いたのではないか。

60) 前出「原亮三郎君伝」『商海英傑伝』9ノ56～57。

61) 同上、9ノ57。

宮島大八等の設立した善隣書院，岸田吟香，阪上半七，名塩佐助，板本嘉治馬等の勸学会（上海に分会），伊沢修二等の泰東同文局，地図と地球儀を輸出した松邑三松堂，下田歌子，山田準一等の作新社（上海で開業）が陸続と設立された。⁶²⁾

そのうち伊沢修二の泰東同文局について、『大阪朝日新聞』（1902年〈明治35〉3月10日付）の報ずる記事を見てみよう。

清国の文化開発機関

泰東同文局

泰東同文局の設立○今回伊沢修二氏等の発起にて題号の如き局を東京小石川区小日向第六天町なる同氏邸内に設け、主として清国新政の需要に応ずべき軍事、警察、教育、法律、各種学術に関する書籍及び其の各種学堂の教科書を編纂著述し、其の兼業としては清国に於ける学堂用の理科学器械を代購し、教師の聘用、新聞文書の翻訳を引受け、其の出版及び委託販売の図書は、日清兩國政府の版權を取ることとし、毎月局報を発行して、其の事業の報告を為す筈なりといふ。⁶³⁾

実藤文庫には日本語学習書が収集されており、そのうち民国以前に刊行されたものは52種ある。たとえば、東京善隣書院からは長谷川雄太郎『日語入門』（1900年 明治33）が、東京泰東同文局からは伊沢修二『東亜普通読本』（1905年 明治38）、大矢透著・鐘廣言校『日本文典課本』（同年）、中堂謙吉『新式東語課本』（1906年 明39）、振武学校編『日本言文課本』（同年）が出版されている。また、東京三松堂書局からは小山左文二『漢文註釈 東文読本』（1906年 明治39）が、上海作新社からは唐宝鏐・戦翼翬共著『東語正規』（1900年 明治33刊、1906年 光緒32印）、作新社編『東中大辞典』（1908年 光緒34）が刊行されているし、その他にも東京金港堂から宏文学院編『日本語教科書』（1906年 明治39）が出ている。上記のものほかに中国むけ教科書を出した日本の出版社をひろくと、青山堂、東亜公司、文求堂、有隣書局、国文堂、誠文堂等、名称も日中に関係づけたものも見られる。

金港堂と商務印書館の合併問題は、日中交流史を構成する一側面である。

62) 『日本出版文化史』1938. 4. 29初印。青裳堂書店 1978. 3. 20 影印 926頁。

63) 前出『新聞集成明治編年史』第11巻 388頁。

本稿作成にあたっては、中村忠行氏より多くのご教示を受けました。⁶⁴⁾また、『繡像小説』の原本は澤田瑞穂氏の御所蔵です。末尾ながら記して両氏にお礼を申し上げます。

(たるもと てるお)

64) 文中に記したほかにお手紙をいただき、商務印書館を調べるには不可欠の資料として、『順天時報』『同文滙報』『盛京時報』をお教え下さったが、なさけないことに今回は調査する余裕がなかった。さらに、「商務印書館と日本教習」「同館の中国人」というメモもいただいた。前者には、「○小谷重(文部省図書審査官兼視学官)○長尾楨太郎(高等師範学校教授)○中島端(漢文に精通し、「新訳俄羅斯」の著あり)○伊沢修二(顧問)」という名前が、後者には、「○高鳳謙(福建人、嘗て中国学堂にあり)○張元濟(涵芬楼主)東方図書館の母胎」という名が書かれている。何に拠ったかわからないとおっしゃっているが、これらの人名は、たぶん『東方雑誌』の広告から拾われたものと思う。本稿で触れ得なかった伊沢修二については、「日本教育家伊沢修二君伝略(現為商務印書館編訳所編輯教科書籍顧問)」という文章が『東方雑誌』第11期(1904年12月31日<光緒30>)に掲載されており、中島端についても、『商務印書館と教育年譜』(32頁)に彼の名が見えることのみここに記しておく。